
俺とあいつと彼女と浮気

蹴球少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とあいつと彼女と浮気

【Nコード】

N4406F

【作者名】

蹴球少年

【あらすじ】

あいつが浮気をしている。同棲中のあいつが浮気していることを知った俺は仕返しのために女の子を見つける。その娘が本当にいい娘で・・・この仕返しの果てにあるものは

俺の苛立ちを、人はみっともないとでも言うのだろうか？

女の焼きもちは可愛くて男の嫉妬はみっともないだなんて言われるのは理不尽だ。

男だろうが女だろうが自分の恋人が浮気してたら苛立つのだ。

そんなのは当然だ。

だから俺は自分の恋人が浮気していれば怒りもする。

この怒りをみっともないなどと言われる筋合いはない。

この怒りをあいつにぶつけてやろうと思う。

俺はあいつがホテル街を男と二人で歩いているのをたまたま見かけたのだ。

だが、今回は証拠がない。

俺がこの目で見たのだから確証はある。

だがあいつはなかなか賢い。

詰め寄ったところでうまくかわされるのはまず間違いない。

ならばどうするべきか。

長いこと考えて、結局子供じみた答えになったことには、まあ目を瞑ろう。

単純ではあるが、やっぱり目には目を、歯には歯をだ。

俺も別の女と付き合ってやる。

なんて怒りに任せて街を歩いて、やっと見つけた娘がまあなんともいい娘だった。

まさかあっちから声を掛けられるとは思っていなかったが、外見は可愛いし素直だし驚くほど話も合う、あいつなんかより数倍いい女だ。

ざまあ見やがれ。

もう泣いて謝ってきてても許すつもりはない。

「やつほ、お待たせ」

待ち合わせの駅に彼女がやってきたのは時間の五分前だった。

俺は少し早く着すぎていたけど、待っている時間は決して苦痛でもなんでもなく、むしろ学生の頃に戻ったようなくすぐりたい気分だ

った。

こうやって何度もデートを重ねていく。

あいつといるときに似た感覚はあっても、やっぱりドキドキの具合はまったく違う。

俺はいつの日かあいつの浮気なんてどうでもよくなっていた。

彼女と付き合い始めてちょうど一ヶ月ほど経った頃。

一応同棲は続いているあいつが部屋に携帯を置いたままコンビニに出かけていった。

すでにどうでもいいことではあったけど、俺はなんとなくあいつの携帯を手にとっていた。

メールを見るとまあわかりやすく俺ともう一人の男の名前がずらりと並んでいた。

他にも女友達が何件かあったが特に目には入らない。

やっぱりそうだったか。

とまあそのぐらいにしか思わなかった

写真のフォルダを見て今度は呆れてしまった。

あのときの男との写真を見つけたのだ。

「はぁー」

どうでもいいとは思いつつ、彼女に見せようと思ってその写真を自分の携帯に入れた。

彼女は同情してくれるだろうか？

自分のみみっちさだつて俺にとってはどうでもいいことだった。

ただ彼女との話が盛り上がることを望んでいた。

そしてあいつが帰ってくる前に携帯を元に戻した。

こんなバレバレな浮気をする女と付き合ってたとはな、と大仰なストリップを見て思った。

「部屋にいつてみたいな」

そんな嬉しいことを言ってくれたのはその晩のことだった。

俺はさっそくあいつに『今日は風邪をひいたから一人になりたい。どこかのビジネスホテルか友達の家泊まってきてくれ』とメールを入れておいた。

一応心配しているような返信もあったが気にはしない。

彼女のことで頭がいっぱいだっただ。

「おじゃまします」

「ごめんね、ちょっとちらかってるけど」

なんてお決まりのやり取りをして、コーヒーを出す。

ものめずらしそうに部屋を見回す彼女の横顔がまた可愛く見える。

たまらなく愛しくてそっと抱きしめてやった。

彼女はいつものように何も言わずにそっと俺の背中に手を回す。

しばらくして離れると、彼女はほんのりと顔を赤らめていた。

そこで俺の目に飛び込んできた携帯電話。

そういえばと思ってあいつの携帯から見つけた写真を彼女に見せる。

もう彼女がいることを彼女は知っているからたまに愚痴を聞いてもらったりもしている。

これはその延長みたいなものだ。

「ほら、俺に隠れてこんなやつと付き合ってたんだ。ひどいと思わない？」

「ほんとだあ」

反応は俺の思った通りだった。

「ひどいだろう？」

「でもさあ、君もやってるんだから一緒なんじゃない？」

む、まさかこんなことを言われるとは。

「いや、あっちが先なんだよ。だからこれは仕返しなんだ」

「ふーん」

まずい、突然興味をなくしてしまった。

「なんかかつこ悪いね」

わあ、これは本格的にヤバイ。

なんとか立て直さないと。

「それとさ、最後だから言っとくけど・・・・・・・・・・」

気の聞いた言葉を探す俺に、彼女は構わず話を続ける。

ていうか最後ってどういうことだ？

「私のこと見たことない？初めて会ったのって一ヶ月前なんかじゃないと思うよ」

「……………この子は何を言っているんだ？」

まったくわからない。

「何を言ってるの？」

「だからさあ、見覚えはないわけ？」

つまらなそうな顔で今度は携帯を指差している。

慌てて手にとって開いたが何もわからない。

「なんだっていうんだ」

苛立ちで彼女の目をまっすぐに見ることができない。

『ガチャッ』

俺が焦っている間に、なぜか玄関の扉が開いた。

血の気がサーッと引いていった

「……………風邪ひいたって割には、ずいぶんと元気そうね」

皮肉なんか言ってくるが俺には何がなんだかわからない。

「浮気するのもいいけどバレないようにうまくやりなさいよ」

その言葉を聞いて、俺は一瞬で頭に血が上った。

単純だとかそんなのはどうでもいい。

「なに言つてやがる、浮気したのはそっちだろうが」

「この状況でなに言つてるのよ」

相変わらず冷たいものの言い方だが俺は怯まない。

「何も知らないと思つてるのか？俺はお前が男とホテル街にいるのを見たし、その男と一緒に写つてる写真だつて見たんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・これのこと？」

ストラップだらけの携帯を見せ付けてきた。

「ああ、言い訳なんてないだろう」

「まあ、言い訳なんてないけどさ、この男つて・・・・・・・・・・」

「なんだ？」

「あんたの横で寝てるんだけど」

「・・・・・・・・・・はあ？」

「俺のこと見たことあるんじゃない？」

「・・・・・・・・・・まあ、見たことあるわな」

彼女はあいつと写真に写ってたやつにそっくりなわけだし。

——勘弁してくれ。

（後書き）

お付き合いいただきありがとうございました
ちよつと読みづらかったかもしれませんがどうでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4406f/>

俺とあいつと彼女と浮気

2010年11月18日03時41分発行